

原爆音楽の軌跡

第六期（1996～2005）

この時期の活動として、手前味噌ではあるが、まず被爆50年を契機に始められた「ヒロシマと音楽」実行委員会の活動を挙げなくてはならないだろう。中国放送の支援を得て、学識経験者、広島市諸機関の関係者、中国放送のスタッフで構成された実行委員会は、二つの大きな目的を掲げるようになった。ヒロシマに関わる音楽のデータベース化とそれらの音源化である。データベースの作成は、既存のリストをベースにして、多方面にわたる原爆音楽の掘り起こしを行い、作曲者や演奏者の手で眠り続けている未登録のデータを収集し、順次リストアップしていく作業で、困難を極めるものであったが、2002年の実行委員会の解散時には約1800曲を登録することができた。一方の音源化の作業も、毎年コンサートを開催し、新旧のヒロシマに関わる音の収録を行ってきた。この委員会は、その後民間の有志による「ヒロシマと音楽」委員会に受け継がれ、音源化の仕事は終えることになったが、データベース化の作業は継続され、04年当初の念願でもあった広島市への寄贈が実現し、1867曲の資料が広島平和文化センターに引き渡された。これによりこれまでの仕事は一応終止符を打つことになった。「ヒロシマと音楽」のデータベースは、これまでも中国放送のホームページから検索することができたが、今後は広島市の「平和データベース」のホームページ上から容易に検索が可能となり、音源や楽譜の有無、所在等を確認することができるようになった。これまで情報を手に入れにくかった一般の音楽愛好家や演奏家にとって朗報となるであろうし、適切なものは教材として検討することも可能となった。

ところで、前の時期に確認された国際化の傾向はますます拡大すると同時に、市民レベルでの活動なども加わって、いっそう一般化、大衆化の傾向をみせていく。60周年を迎えた2005年の地元の新聞をめくってみても、米国（シアトル）、ドイツ（ベルリン）をはじめ、これまで見られなかったドミニカ共和国やウルグアイなどでもヒロシマの歌が響き渡っている。一方、広島では8月6日を中心に、大小さまざまなコンサートが催され、枚挙に暇がないほどである。出演層も子どもから大人まできわめて幅が広い。目に付くものを挙げてみると、「ヒロシマの響き～未来への追憶」（7月6日）、「被爆60周年を悼む コンチェルト スピリトゥアーレ」（7月16日）、「平和教育プロジェクト〈スレノディ〉演奏会」（マリー・シェファー作曲 7月30日）「慰霊のタベコンサート」（8月5日）、PEACE MUSIC WORLD（8月5日）、「広島平和コンサート2005」（佐渡裕ほか8月6日）、「ヒロシマ60」（8月6日）、「南こうせつ in 世界平和祈念聖堂」（8月7日）、「林光・東混～八月のまつり」（8月6日）、「平和コンサート 6人のチェロの響き」（8月6日）、「広島観音高校音楽部OB合唱団祈念コンサート」（8月7日）、「ピカドン竹やぶ」（はらみちを作 8月7日）「No More War～愛の祈り」（高校生バンド8月14日）、「被爆60周年を祈念して～七つの川から七つの海へ」（9月19日）、「世界へおくる平和のメッセージ」（小沢征爾ほか 10月21日）、「日本のうたごえ祭典 in ひろしま」11月4日～6日）など。これらのコンサートで取り上げられる曲は、新・旧のいわゆる原爆音楽のほか、音楽史上の鎮魂や平和に因んだ名曲が選ばれている。これらの中で広島出身の作曲家、細川俊夫が音楽監督を務めた「ヒロシマの響き」では、芥川也寸志の《黒いオルフェ》（広島初演）と自作の《ヒロシマ・声なき声》（本邦初演）が演奏され注目された。作曲者による研ぎ澄まされた祈りのメッセージはもとより、広島交響楽団と地元の演奏陣の奮闘もあって、原爆作品の質の高さが証明されたといっても過言ではないだろう。

「慰霊のタベコンサート」では、ドイツの作曲家ウーヴェ・ロアマンの〈ヒロシマの原爆犠牲者に捧ぐ〉が世界初演された。佐渡裕が広島交響楽団と世界の若手演奏家で編成する管弦楽団を指揮した「広島平和コンサート2005」では、女優の吉永小百合のほかチェリストのマイスキーなど内外の有名演奏家が出演し、故バーンスタインの交響曲《カディッシュ》、〈広島平和の歌〉などを演奏した。この模様は放送メディアを通して全国に中継され、多くの人々の間で「ヒロシマと平和」というキーワードを共有することができたと思われる。同じことは「世界へおくる平和のメッセージ」でフォーレの《レクイエム》を指揮した小沢征爾のコンサートでも言うことができる。平和イベントと称するこのコンサートは早くからの宣伝効果もあってか、大会場のチケットがまたたくまに売り切れとなってしまった。小沢は言う。「われわれが死に絶える前に、薄れ行く原爆の記憶と平和の祈りをこれからの命に伝えたい」と。これらのコンサートは、有名人によるイベント的側面をもっているが、音楽によるメッセージは確実に聴衆の心を揺り動かしたはずである。このような話題性の多いコンサートのほかに、一貫してヒロシマにこだわり続け、原爆音楽活動の幹になっている作曲家や演奏団体も多様化しつつある。バンドによる平和ライブを試みる高

校生は「自分たちのスタイルで多くの人に平和を訴えたい」と主張する。被爆60年の夏、ドイツで追悼演奏会の企画構成にかかわったペーター・ハウバーは、「音楽で人道的な心を開き言葉でメッセージの意図を伝える」と述べている。永井博士の著作から暗示を受けて「スレノディ」を作曲したカナダの作曲家、マリー・シェーファーは、60周年の記念日を前に広島を訪れ、「音楽を通じ、惨事を乗り越えて平和に生きることを祈りたい」と訴える。

参考文献

- ・ 原爆被災資料広島研究会『原爆被災資料総目録』第二集 原爆被災資料広島研究会 1960年
- ・ 中国新聞社編『年表 ヒロシマ～核時代五十年の記録～』メディア開発局出版部 1995年
- ・ 『中国新聞項目別記事索引』昭和49年7月～平成10年7月 中国新聞社

(原田宏司・広島大学名誉教授)